

中西真彦代表理事

中西でございます。

今日は皆様大変ご多忙の中を、このように大勢の方に来ていただきましてありがとうございます。また、下村文部科学大臣においては、超ご多忙な中、お越しいただき有難うございます。

振りかえりまして、今から20年ほど前、私は経団連の土光さんが創った国際科学振興財団の第4代の会長として筑波市に在った国立の地質研究所で面談をしておりました。その時、面談の途中でシャーベットが出てきて、私はてっきりおやつにシャーベットを出してくれたかと思っていたところ、そこにいた研究者の若者がニヤッと笑って、そのシャーベットにライターを近づけるとそのシャーベットが猛然と青い炎をだして燃えた。いわゆる燃える氷の初対面だったのです。そこで、自慢話めいて恐縮ですが、これは将来日本のエネルギーの重要な役割を担うものだと確信しまして、東京に帰りまして、時の通産次官であった堤さんのところへ行って「あんたこれ試掘をやったらどうだ」と尻を叩いたわけですね。翌年、御前崎沖で試掘をやりました。その結果日本のエネルギー消費量の100年分にも相当する膨大な量の可採推定埋蔵量が日本の太平洋側、日本海側に合わせて100年分近い量が眠っていると正式に新聞紙上に発表しました。正にこれは天の配剤と読んでいるのですが、天の配剤と呼べる素晴らしいエネルギーなのです。

話は変わりますが今から4年前、私は今ここに居られる元通産次官の小長さんの所へ行って、2011年2月5日、何と言うか、胸騒ぎしたというか、勝手に足が動いたというか、何ともはやこれと言った根拠もなかったのですが、元通産次官の小長さんに「あなた、もし日本でチェルノブイリクラスの原発事故が起きたらどうします？ 中東で動乱が起きて石油の入手ができなくなったらどうしますか？」という質問を投げかけた。そうしたら、すぐさま、「中西さん、安全保障・エネルギー委員会を立ち上げましょう」といって2人で手を尽くして、メンバーは例えば9電力会社が出資している電力中央研究所理事長とか、石油連盟専務理事とか、東大教授とか19人の方々に声をかけ、委員長は俗にエネ研といわれる資源エネルギー庁傘下の日本エネルギー経済研究所理事長である豊田正和さんに委員長になってくれと言って、安全保障・エネルギー委員会を立ち上げに向けて発進した。そうしたら、妙な話ですが、待っていたが如く、翌月の3月11日、福島原発がドーンと来たんですね。地震と津波に伴ってチェルノブイリクラスに勝るとも劣らない大変な原発事故でありました。まだこの時点では、外交安全保障という言葉はありましてエネルギー安全保障という言葉などは無いんです。この時点での話であります。まあ、皆さんご案内の様に、国家のエネルギー安全保障戦略というものは、かなり将来の見通しが長期的なものでなければいかんわけですが、メタンハイドレードは有限の資源ですからまもなく、まもなくは今の時点では言いすぎですが、いずれは底をつく。その時に、日本のエネルギー政策は、今日のシンポジウムでとりあげる核融合である。ですから核融合は、そういう意味で次世代の日本のエネルギーを支えるベースであります。これはですね、言うならばそのボリュームといい、その安定供給性、その継続性という点でも素晴らしいエネルギー源であることは間違いありません。日本には大きく2つの流れがありまして、一つは、岐

岐阜県土岐市に研究拠点があるヘリカル方式と、もう1つは茨城県那珂市に拠点のあるトカマク方式という研究の流れがございまして、この両者は別々の流れがあるものではありますが、今日はその重要な立場に居られる方々が自ら進んで、今日は重要な会であると、自ら進んでお集まりいただきました。従がございまして今日のこのシンポジウムは、日本的な国家的視点から、日本の将来を支えるベースであるべきエネルギー源の展開についてお話いただけたと思います。勿論、専門的にはまだまだ核融合開発は解決しなければならない問題は山積していますが、何れの日にか着実に問題を解決して、メタンハイドレートの子世代のエネルギーとして躍り出ると信じています。

どうか今後も皆さん方のご支援ご協力をいただかなければ、この国家的事業は前に進みません。今後も皆様方のご支援ご協力をいただけますようお願いして、挨拶に代えさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。